Vol.19
2014年9月12日
日本災害復興学会
News letter

目次 -contents-

1 復興しない被災地はない
長岡大会実行委員会副委員長 上村靖司
2 2014年度 長岡大会
○日程・会場
○プログラム
○公開シンポジウム
3 ○分科会
○オーガナイズセッション
○エクスカーション
4 日本災害情報学会から
日本災害情報学会事務局
5 復興応援通信
○被災地NGO協働センター 増島智子
○東北大学教育・学生支援部 特任准教授 藤室玲治
6 消息
現場から
○若い世代 所澤新一郎

※学会現況(2014年8月22日)
現在の会員 375
正会員 337・学生会員 31
購読会員 3・賛助会員 7

発行人 中林一樹
TEL:0798-54-6996
FAX:0798-54-6997
http：//f-gakkai.net/
〒662-8501
兵庫県西宮市上ケ原一番町1番155号 関西学院大学災害復興制度研究所気付

復興しない被災地はない—中越十年—

長岡大会実行委員会副委員長 上村靖司（長岡技術科学大学）

あの日から10年が経とうとしている。

もともと人口減少、産業衰退のトレンドに歯止めのかからない中山間地域。危機的状況に気づけない「茹でガエル」だった。震度7で大きく揺さぶられた旧山古志村は4割近く、隣接する小千谷市東山では半分の人口が流出し、中越復興のキーワードは「地域復興」となった。

人口も震災前に戻ることはないし、産業や経済がV字回復することもないだろう。だが過疎化の時計を強制的に20年進められた地域では、あちこちで復興バネを効かせた活動が芽吹き、育ってきた。交流人口が増え、農家民宿も農家レストランも生まれた。そして各地で次世代の台頭も見え始めた。「人口減少は必ずしも衰退を意味しないことを証明した」というと言い過ぎだろうか。

2014年6月1日、全国植樹祭が中越で開催され、天皇陛下のお手植え会場となったのは中越メモリアル回廊の拠点の一つ「きずな館」の前であった。震央に近いこの地から、子供たちが色とりどりの風船を一斉に放った青い空に向かって、お手植えの木々は大きく成長していく。復興10年の区切りにふさわしい記念樹となる。

今年の学会大会は、中越地震発生から10年を迎える長岡市で、10月23日から26日に開催される。今回は長岡中心市街地の顔としてすっかり定着したアオーレ長岡が会場である。アオーレとは「あおーれ（会おうね）」であり、東側に市役所、西側市民協働センター、中央にはナカドマと呼ばれる中央の屋根付き広場がある。名前の通り、市民の集う空間として、一年中様々な行事で活気づいている。この賑わいは、あの震災がなかったらどうだっただろう、とふと思う。被害の大きかった山古志、川口、小国、栃尾はすべて長岡市に合併し、役場は支所となって行政の統治機構は弱体化した。一方で市民活動は眼を見張るほどに活発化した。そして「民による公」を担うNPOも各地域に誕生した。中越復興を象徴する市民の賑わいを会場で感じてもらいたいと思う。

エクスカーションでは住民と何年も議論を尽くしてつくりあげたメモリアル施設群を紹介する。きおくみらい（長岡）、そなえ館（小千谷市）、きずな館（長岡市川口）、やまこし復興交流館おらたる（長岡市山古志）である。

復興に正解はない。だが「復興しない被災地はない」。10年経って改めてそう感じている。まだまだ課題は山積みだ。だがそれはもはや災害復興ではない。次の10年に向けて看板をかけかえて、地域一丸となって大好きな中越を皆がもっと誇らしく思える地域に育てていきたいと思う。

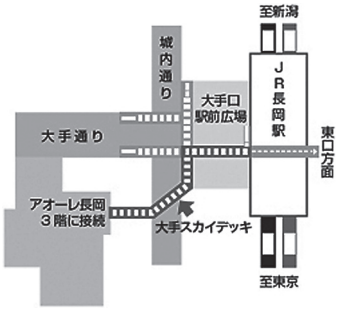
2014年度 長岡大会

●日程

2014 年 10 月 23 日 (木) ～ 26 日 (日)

●会場

アオーレ長岡
（長岡市大手通 1-4-10）
※ JR 長岡駅西口から大手スカイデッキを通って徒歩 3 分



●プログラム

【10 月 23 日】
14:00 － 19:00　エクスカーション

【10 月 24 日】復興学会
10:00 － 16:00　分科会（4 つ）Ⓕ
10:00 － 16:00　オーガナイズドセッション（3つ）Ⓕ
10:00 － 16:00　ポスター展示Ⓕ
16:00 － 17:00　全体会議Ⓕ
18:00 － 20:00　ナイトセッションⒿⒻ

【10 月 25 日】復興学会・情報学会
10:00 － 12:00　口頭発表ⒿⒻ
12:00 － 13:30　ポスター発表ⒿⒻ
13:30 － 17:00　公開シンポジウム
18:00 － 20:00　交流会（ニューオータニ長岡）

【10 月 26 日】
9:30 － 12:00　口頭発表　Ⓙ
13:00 － 15:00　総会・授賞式　Ⓙ
15:00 － 18:00　口頭発表　Ⓙ
※Ⓙは情報学会行事
Ⓕは復興学会行事

●参加費等

◇参加費
（4 日間、両学会共通）　2,000 円
◇予稿集代
日本災害復興学会　2,000 円
日本災害情報学会　2,000 円
◇交流会　4,000 円
◇エクスカーション　3,000 円

●公開シンポジウム

◆開会挨拶（13:30）
・布村 明彦 (日本災害情報学会・会長)

◆第 1 部　パネル討論 1（13:35 ～）
「中越大震災と復興情報
～情報伝達の進歩と新たな課題」
○パネリスト
・泉田 裕彦（新潟県知事）
・長島 忠美（衆議院議員）
・田中　淳
（東京大学大学院教授／日本災害情報学会・副会長）
○コーディネータ
・山崎 登（NHK 解説主幹／日本災害情報学会・副会長）

◆第 2 部　パネル討論 II（15:05 ～）
「中越から東日本大震災へ
～新たに見えてきた復興推進の課題」
○パネリスト
・森　民夫（長岡市長）
・中林 一樹
（明治大学大学院教授／日本災害復興学会・会長）
・木村 拓郎
（減災・復興支援機構／日本災害情報学会・理事）
○コーディネータ
・渡辺 隆（新潟日報社・専務取締役）

◆閉会挨拶（16:25）
・山中 茂樹
（関西学院大学・教授／日本災害復興学会・副会長）

分科会

◆分科会１　集落復興に必要な視点を考える

若者や地域住民が得た復興へ得た視点を、各地の集落の復興まちづくりに詳しい登壇者や日本災害復興学会会員の方と共有し、「集落復興に必要な視点」を議論する。
▽コーディネータ：福留邦洋・藤室玲治

◆分科会２　震災学習とその手法を考える

災害が発生してから 4 年 (東北)、10 年 (中越)、20 年 (阪神) という異なる時間軸にある各被災地で展開されている「これまで」の災害の記憶継承の試みと、「これから」の震災学習のあり方について議論する。
▽コーディネータ：阪本真由美

◆分科会３　これからの復興情報を考える

昨年度に引き続き，阪神，中越，東日本の復興プロセスにおける「情報」の意義と効果，被災者や支援者に求められる情報リテラシー，団体・に求められる情報の発信力・活用力・連携を考える。
▽コーディネータ：津久井進

◆分科会４　復興人材を考える III

前回大会に引き続き、東日本大震災の災害復興にかかわる人材に焦点をあて、震災から３年半経過した被災地の変化に伴う役割や体制の変化について、現状を共有しつつ議論を深める。復興人材間の新たなつながりづくりも促す。
コーディネータ：宮本匠・石塚直樹

オーガナイズセッション

①「災害への法的対応の論点―法理論と実務の視角から」
　　コーディネータ：飯孝行

②「中山間地における住民主体の復興と外部者：中越地震・小千谷市塩谷集落の事例より」
　　コーディネータ：関嘉寛

③「災害復興過程における地域社会経済的資源の役割：　岩手県野田村のケーススタディー」
　　コーディネータ：李永俊

エクスカーション

●日時：10 月 23 日（木）
●募集人数：各コース 50 名（最少催行人数 15 人）
●集合：14 時に長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」

●内容（調整中）
　14:00　中越地震の概要説明（共通）

【A: 山古志コース】
　15:00　バス移動
　15:45　水没家屋／郷見庵（山古志木籠）
　16:25　山古志闘牛場（山古志池谷）
　16:55　集団移転地「天空の郷」
　17:10　やまこし復興交流館「おらたる」見学・語り部
　17:56　追悼イベント参加
　18:30　バス移動（19 時 10 分頃長岡駅前着）

【B: 川口コース】
　15:00　バス移動
　15:35　妙見メモリアルパーク（長岡市妙見）
　16:00　おぢや震災ミュージアム「そなえ館」
　17:20　「川口きずな館」見学・語り部
　17:56　追悼イベント参加
　18:30　バス移動（19 時 10 分頃長岡駅前着）

日本災害情報学会から

日本災害情報学会事務局

日本災害情報学会は、「災害情報」をキーワードに、防災・減災に役立つ災害情報や、その伝達・受容のあり方などを調査・研究し、その成果を社会に提言することを目的に、1999年4月に設立されました。

現在の会員数は約800人（法人会員を含む）です。会員には、学者、研究者、行政機関、マスメディア、ライフライン、シンクタンクなどの防災担当者などが多く、学術的な研究に加え実践的な色合いの濃いユニークな学会です。また、「災害情報」という学際領域のテーマを扱っていることから、自然科学分野、情報・通信分野、人文・社会学の分野など、幅の広い専門家で構成されています。

日本災害情報学会には5つの委員会があり、これらの委員会が中心になって学会誌や毎年4回のニュースレターの発行、学会大会や勉強会の開催などの活動を行っています。また東日本大震災のように大災害が発生したときは、学会として調査団を編制し被災地の住民や災害対応に関わった各種機関などを対象に調査を実施しています。

委員会の一つに「廣井賞表彰審査委員会」があります。この制度は故廣井脩初代会長(東京大学大学院教授)の業績を讃え、その志を後世に伝えるための制度で、毎年1回、災害情報等の発展に著しい功績のあった個人または団体を表彰しています。この『廣井賞』は、社会的功績、学術的功績、特別功績の3分野からなり、2007年に制度をスタートさせてから社会的功績で11団体、学術的功績で5人、特別功績で1人に授与しました。今大会でも10月26日の学会総会の終了後に表彰式を開催します。また、当学会では今大会から新しい表彰制度もスタートさせる予定で、その表彰式も26日の口頭発表終了後に開催します。

今年の第16回大会は、新潟県中越地震から10年という節目の年にあたることから日本災害復興学会と初めて合同で開催することにしました。その理由として災害を研究している両学会は危機管理や被災者の生活再建などの面で連携が必要なことがあげられます。またお互いに研究情報や活動の情報を交換することで研究内容の充実や新たな研究テーマを発掘することが期待できます。このような目的から情報学会としては、例年の研究発表の他に復興学会とタイアップして24日にはナイトセッション、25日には公開シンポジウムを開催します。ナイトセッションでは、両学会の中堅・若手の研究者を中心に、災害関連の研究の今後について意見交換をしていきたいと思います。

減災対策を着実に推進するために「災害情報」の重要性がいっそう増してきています。今大会を契機に多くの方の入会を期待しています。

東日本大震災

復興応援通信

◆想いを繋ぐ「まけないぞう」

被災地 NGO 協働センター　増島智子

当センターは、主に被災者の生きがい協働事業「まけないぞう」や足湯を通して被災者支援を行っています。前者の事業については岩手県を中心に宮城県、福島県など 70 名ほどの被災者の方が「まけないぞう」をつくってくれています。

3 年が過ぎた被災地では、ボランティアが減り、道路や堤防などの公共事業はすすんでいるものの肝心の被災者のくらし再建は進まず、先の見えない状況が続いています。また、仮設では引っ越す人も出はじめて自治会が崩壊し、孤独死などが発生しています。一方、念願の復興住宅に入居しても、大きな鉄の扉に阻まれて、近所の声すら聞こえず「まるで牢屋に入れられているみたい。とっても淋しい」と訴える人もいます。復興住宅と言っても集会所もなく、コミュニティの形成が難しく、自殺者がでたところもあり、孤独を感じている人たちが少なくないようです。

「私はやっぱり白いぞうさんが大好き」と言いながらタオルを縫う大槌町在住の女性

私たちの支援先でもある千葉県の旭市でも今年 5 月に約 200 世帯の仮設住宅が解消されました。持ち家の人だけ優先的に復興住宅に入居できたものの、津波前に借家住まいだった人は、民間住宅を斡旋され、復興住宅へはわずか 33 世帯しか入れなかったそうです。そこで最近、民間住宅へ引っ越された 2 名の方が孤独死でみつかったそうです。1.17 で経験したような不幸なできごとが 3.11 の被災地でも繰り返されていることに憤りを感じます。

3 年が過ぎ、被災地の風化が叫ばれる中、「まけないぞう」を通して、「ぞうさんに心癒されているよ」という言葉を被災者から聞くと、細々とでも「まけないぞう」を続けていくことが大事だと思っています。

◆被災者の心とコミュニティの復興のための学生ボランティア活動

東北大学教育・学生支援部 特任准教授　藤室玲治

学生ボランティア活動の支援をはじめ、東北大学生や海外の学生向けのボランティアツアーやスタディツアーの企画・実施などをしています。

神戸大学時代は岩手県陸前高田市を中心に活動していましたが、いまは宮城県や福島県に足を運ぶ機会も増えました。

陸前高田市では仮設住宅での足湯や手芸のボランティア活動を主に行っていますが、今夏は仮設住宅入居者の皆さんが「次の住まい」について大きな決断を迫られる時期です。これまで入居者のお世話を積極的にされていた自治会長さんが、自力再建などで仮設住宅を出て行かれることも多くなりました。支援の仕方、関係の作り方をまた一から考えていく時期だと思い、他大学とも協力して仮設住宅会長へのインタビュー調査などをしています。

また、津波で大きな被害を受け、人口が激減した集落では、家が無事であったり修復可能だったりしても、交通インフラ、学校、商店、医療機関、支え合うコミュニティなどの喪失により、住み続けることが困難になっている場合があります。福島県で帰村の始まった田村市や川内村でも同様の困難が見られます。

足湯や手芸を通して仮設住宅等で被災した方のお話を聞く▽帰村した方の荒れてしまったお庭を整備する▽人口減少集落の伝統行事やお祭りに参加する―など、心とコミュニティの復興に対して学生ボランティアが貢献できることはたくさんあります。

これからも一人でも多くの学生に被災地に関心を持ってもらい、被災した方々に寄り添えるような活動をコーディネートしていきたいと思っています。

田村市都路地区に帰村した方の庭の整備を終えた学生たち。集落に来た人々のためにお花畑をつくるのが持ち主の夢

消息

◆**入会**＝カッコ内は所属。敬称略。
正会員▽佐々木 晶二（(一財）民間都市開発機構 都市研究センター 副所長）▽髙山 聡宏（野田総合法律事務所 弁護士）▽宇都 彰浩（宇都法律事務所 弁護士）▽古本 尚樹▽三澤 寿美（東北福祉大学 健康科学部保険看護学科 教授）▽樋口 康太郎▽稲場 圭信（大阪大学大学院 人間科学研究科 准教授）▽塩沢 祥子▽山口 洋典（立命館大学 共通教育推進機構 准教授）▽山本晋吾（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 事業部普及課 普及課長）
学生会員▽竹内 宏規（関西学院大学大学院 総合政策研究科 博士課程後期課程）▽宮前 良平（大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程１年）▽李勇昕（京都大学大学院情報学研究科 防災研究所巨大災害センター）▽大門 大朗（大阪大学大学院 人間科学研究科）▽身玉山 宗三郎（神戸大学大学院 国際協力研究科 後期博士課程）▽﨑浜 公之（大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程１年
◆**異動**＝新所属（旧所属は、前年度会員登録時）名前。
▽神戸常磐大学 保健科学部 看護学科 教授（兵庫県立柏原看護専門学校）畑 吉節未▽㈱パスコ 関西事業部技術センター 国土基盤技術部（㈱ニュージェック 河川グループ河川計画室）松田 哲裕▽慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特別招聘教授（㈱セラフ）下村 健一▽東京大学大学院 情報学環総合防災情報研究センター 特任准教授（東洋大学 社会学部 メディア・コミュニケーション学科 専任講師）関谷 直也▽阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究員（大阪市立大学 文学研究科）菅野 拓▽千葉大学 コミュニティ再生ケアセンター 特任准教授（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究員）石川 永子▽名古屋大学 減災連携研究センター 特任准教授（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究員）阪本 真由美▽専修大学 法学部 准教授（弘前大学 人文学部 准教授）飯 考行▽神戸学院大学 現代社会学部 教授（ひょうご震災記念21世紀研究機構 副理事長）清原 桂子▽関西大学 社会安全学部 助教（日本放送協会 専任ディレクター）近藤 誠司▽関西大学 社会安全学部 准教授（大分大学 教育福祉科学部 准教授）山崎 栄一▽東京大学大学院 情報学環総合防災情報研究センター 特任助教（北海道大学大学院 理学研究院付属 地震火山研究観測センター）定池 祐季▽福島大学 福島未来学推進室事務局 地域コーディネーター（富岡町生活復興支援おだがいさまセンター）北村 育美▽共同通信社 編集委員室 編集委員兼論説委員（共同通信社 仙台支社編集部 担当部長）所澤 新一郎▽㈱オリエンタルコンサルタンツ ＧＣ事業本部プランニング部（(財）都市防災研究所 主任研究員）大和田 清隆▽神戸学院大学 現代社会学部 教授（大阪読売サービス編集制作本部 企画編集委員）安富 信▽日本福祉大学 福祉経営学部 准教授（岩手県立大学 社会福祉学部 准教授）山本 克彦▽阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究員（徳島大学 環境防災研究センター 特任准教授）照本 清峰▽大阪府立大学 地域連携研究機構 特認助教（大阪大学大学院 学生）石原 凌河▽㈱ハイドロソフト技術研究所 環境解析グループ（㈱碧浪技術研究所）三島 豊秋▽兵庫県防災企画局（兵庫県民部災害対策局）松原 浩二▽三陸ジオパーク推進協議会 上席ジオパーク推進員（火山都市国際会議島原大会事務局）杉本 伸一

現場から from the Spot

若い世代

共同通信編集委員室 所澤新一郎

東日本大震災で被災した宮城県女川町で、募金活動をしながら石碑を津波到達地点に建てている高校生たちがいる。そのうちの１人の女子生徒が会合で「格好いいと思える町内の大人は」と聞かれた。生徒はちょっと考えて答えた。「女川で格好悪いと思える大人は１人もいません」

地元で奮闘している男性にこの話を伝えると、彼は目をうるませた。「そう言っていましたか…」。若い世代はちゃんと、震災以後の大人の背中を見ている。南三陸町でも「子ども達を前にすると、背筋がしゃんとする」という事業者の声を聞いた。

被災地の若い世代と話をすると、震災前は「地元が好きでなかった」という声が多い。「休日はイオンしか遊ぶところがない。早く東京や仙台に出たい」と嘆いていたようだ。

その地元観が震災でかなり揺らいだらしい。ある女子生徒は「町の人のあったかさが身に染みた。自然は豊かで魚はおいしいし、結構いいところかも」とつぶやいた。こうした見方の変容は、震災で「外部」「よそ者」とつながったことが大きい。例えばボランティアが海の幸を絶賛する。見過ごしがちだった地元の宝によそ者が光を当てて、輝きを取り戻すことは新潟県中越地震など過去の被災地でもあった。最大の宝は「人」だろう。

この４年間で、ソフトバンクなど多くの企業・団体の支援により被災地のかなりの高校生が海外を訪れた。一度離れて異国から地元を考える視点を持った生徒たちが帰国後、古里のために行動を始めている。福島県いわき市では高校生が自ら発掘した宝を案内するガイドツアーが好評だ。「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」。謙虚で熱く、大人を巻き込む力を持った被災地の若い世代を応援し続けたい。

※「消息」は８月８日現在学会事務局提出分。